

育てるカウンセリングを生かした学級づくり

〈苦戦する先生たちへの応援歌〉

|| 教育の専門家 (professional educator) としての

アイデンティティ (identity) 独自性) と気概を取り戻すために ||

原 一宏

(伊那 西箕輪小)

はじめに

おかげさまで二十七年間担任をさせて頂いている。その間、苦しい、つらい毎日を送っている担任教師を身近に見てきた。私も過去を振り返れば「やめたい」と思ったことは数え切れない。

学級崩壊寸前のクラスも見てきた。やりがい感を見いだせず途中で退職される先生方の姿も見てきた。子ども達が先生の言うことをきかず、途中で学校へ出勤できなくなり、

やむを得ず退職される先生を見てきた。「〇〇先生は力がないから」とその先生のパーソナリティーを問題にして解決してしまおうという職場環境も見てきた。

一方、子育てと仕事を両立させるために、我が子を寝かしつけ、夜再び学校に来て仕事をしている女性教師のひたむきな姿があつた。さらに、時間を超越して、不登校気味の子の家を訪問している担任の姿があつた。頭の下がる思いがした。

どうしたら、先生方が元気にはつらつと自分自身の実践

に誇りを持ち、やりがい感を持って子ども達と楽しくできるであろうか。そのために、今、学校でできることは何であろうか。一担任として、同僚としてこの原稿を書く機会を与えていただいたことに感謝している。

社会環境の大きな変化(核家族化・少子化・共同体社会の崩壊・人と人とのコミュニケーションの不足・公共におけるマナー・ルール等の規範意識の弱さ)が指摘され、その中で生活している子ども達にも本質は変わらないものの感情の出し方(突然きれる)や人との関わり仕方(言葉の荒さ・ソージャルスキルの弱さ)等以前とは大きく違ったものになってきていることはすでに承知の通りである。私たち教師はそういう状況に柔軟に対応していかねばならない。学習意欲の低下・不登校・いじめ・きれる子・指示が通らない子・発達障害を持っている子…。あげればきりが無いが、その対応を巡って先生方が苦戦を強いられていることは言うまでもない。さらに、拍車を掛けるように授業時数の増加に伴い限られた時間の中で、「わかる授業」を展開していかねければならない。そして、追い打ちをかけるように教員評価制度・免許更新制等矢継ぎ早にたくさんの方策が学校に入ってきた。以前にも増して、配布物も多くなってきたと感じるのは私だけであろうか。一年生を担任していた時

(援助活動)を「心理療法」の事のみを指していると誤解されている方がいまだに多い。

従って、ここで扱うのは予防・開発的なカウンセリングである。(その反対は治療・問題解決的なカウンセリングである)前にも述べた人間関係の希薄化が促進されつつある環境にあって、今、教育現場に予防・開発的なカウンセリング(育てるカウンセリング)が注目されてきている。

二 具体的な方策

(1) Q-U (Questionnaire-Utilities) アンケートの利用

学級集団の状態を見ていくときに使われるのがQ-Uアンケートである。言うまでもなく、「Q-U」は学級集団をみるための方法である。観察法、調査法、面接法なども取り入れ、いろいろな面から学級集団をとらえていくことが必要である。Hyper-Q-U(ハイパー・キュー)は、二〇〇七年に新刊になったQ-Uのグレードアップ版である。従来の二つの心理検査(「いじめ」のよいクラスにするためのアンケート(学級満足度尺度)「やる気のあるクラスを作るためのアンケート」(学級生活意欲尺度))に加え、新作の「日常の行動をふり返るアンケート」が加わり3つの尺度から構成されている。「日常の行動をふり返るアンケート」はソー

は最高十数種類余りの配布物があり、全員に配布するまでなんと十分を要した。(二期)そのくらい外部からのいろいろな要請が多いのだと感じた。(特に小学校)さらに、ストリートに無理難題を押しつけてくる保護者の増加でますますその対応に苦慮しているのである。(一時モンスター・アレントなる名前まで登場したが、親御さん自身も悩んでいらっしやることを考えればこういう表現はふさわしくないかもしれない)特に直接関わっている担任教師のストレスは甚大なものであろう。このような状況の中で、先生方も心の健康を脅かされ、鬱状態になったり、やりがい感をなくしてしまっているケースも多い。

こうした状況を打破していくためにはどうしていったらよいだろうか。その方策を見いだし、具体的な実践を述べさせていただくことが本稿のねらいである。

以下に述べる手法は、カウンセリング心理学が背景の理論としてある。カウンセリング心理学(全ての子どもの発達課題を解決し、成長を援助する)とは実践活動を対象にした研究活動及び研究結果の集積であり(国分康孝 二〇〇九「教育カウンセリング概論」図書文化)、「病理的な心理療法」(心の病を治すカウンセリング:臨床心理学)とは区別しているので注意していただきたい。よく先生方にも「カウンセリング」

ジャルスキル尺度(配慮)のスキル・「かかわり」のスキル)を用いて、対人関係力を測ることに、児童生徒および学級集団の状態をより多面的にとらえることが可能になった。Hyper-Q-Uでは子ども達がCSS(Classroom Social Skills)学級生活で必要とされるソージャルスキル)をどの程度身につけているかを調べる事が出来るので、その結果を基に、学級で不足しているスキルを計画的に指導していく事も出来る。

こういうものと、Q-Uのデータという共通のものを使って、学年会でも簡単に対応を検討できる。注意しなければならないことは、担任自身のパーソナリティを問題にするのではなく、「先生のやり方と子ども達の受け止め方のマッチングの問題」として捉えることが必要である。ほぼ七割の児童が満足群に入れば満足型学級といわれている。しかし、満足群に大勢入っていたとしても、いじめは起こらないというわけではない。いじめが起こった時に、満足型学級の場合、早期に解決する力がある。(実際六年生を持っていた時、満足群にプロットされた児童は九十%以上であったが、いじめが起こった)

学級集団はルールとリレーション(相手を尊重して、親和的な人間関係/あたたかくて受容的で自由な人間関係:社会的役割

群にプロットされている子どもたちが不満足群にプロットされている子ども達にどういった関わりをしていけばよいのか、関わるの場を設定していくことが必要である。

③具体的な対応策

ア 要支援群にプロットされている子を中心に担任が毎日声がけする。「元氣?」「へえー。そんないいことあったの。よかったね」面接開始。担任とのリレーションを強める。

イ 帰りの会で不満足群にプロットされている子を中心に良さ見つけ、子ども達から出てこない場合は担任から話しをする。全体の前で褒める。(不満足群にプロットされている子はやはり、こういう場でも良さを見つけてない場合が多い)

ウ 「握手であいさつ」・「アドジャン」「天まで高く(新聞紙タワー)」・「共同絵画」「聖徳太子」などSGEの活用

エ 授業は子ども同士交流し合えるようにグループ学習を多く取り入れる。「〇〇についてグループで少し話し合ってみよう」など。

オ 友だちを馬鹿にしない 友だちを仲間外しにしない 友だちの悪口を言わないを基本のルールに据える

④十月のプロットより(資料2・4・5参照)

侵害行為認知群に属している児童の割合は全体的に低く(学級九・七%・全国十八%)学級内に大きなトラブルは少ない。学級のルールや行動規範がほとんどの子ども達に共有されていると考えられる。非承認群に属している子の割合も低く(学級三・二%・全国十八%)学級でほとんどの子が認められ、意欲的に活動できている。一方、十月に不満足群に属していた子は一九・四%であったが、今回は一六・一%と低くなってきており、要支援群から脱した子ども二名いる。承認得点も上がってきている。(リレーションはだいぶ強くなってきている。…確立できてきている。)しかし、被侵害得点はわずかずつ上がってきている。(ルールの定着度、もう一度、ルールをみんな確認し、定着を図っていきたい。(満足度七十%を超えるようになり、リレーションも強くなってくと自分たちでルールを決めていくようになる。しかし、そのルールが全体まで確認できていないところがあったようだ。全体での再確認が必要である)

一方、三名の子は承認得点が下がってきているので、個別面接を行い気持ちを聞いてあげたり、全体で意図的に褒め、友だちとの関わりを多くさせ、その中で良さを発見させたい。

⑦SS(ソーシャルスキル)尺度から(資料6参照)

(分析)承認得点の平均変わらず、被侵害得点の平均がややアップ。要支援群には不満足群にいた二名がプロットされてしまふ。この二人に対する個別の対応の仕方が不十分であったようだ。

⑤具体的な対応

ア もう一度ルールをみんな確認する。あった方がよいと思うルールを子ども達から出させる。

イ 保護者の方にも協力して頂き、勉強の様子なども含めて定期的に懇談会を開始する。

ウ 友だち関すること、嬉しかったこと、友だちの良さを書いている日記をクラスの前で読み、紹介する。

エ 運動会の中に、創作ダンスを入れ、グループ同士の関わりをさらに深める。ダンスの発表会を開く。

オ 音声言語のコミュニケーションに慣れてきているので、非言語のコミュニケーション活動をさせてみる。(SGEの「身振り手振り新聞紙の使い方」など。

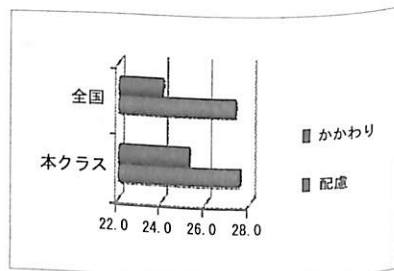
カ 友だちとの関わり…見て見ぬふりをしない。良くないなど思ったら、注意する。再確認。注意された方は「ありがとう」と言う。一回で注意を聞く。等を再確認し、注意の仕方のトレーニングをする。

⑥二月のプロットより(資料3・4・5参照)

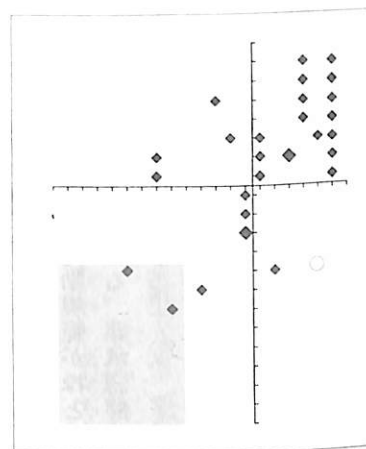
本クラスの「配慮」のスキルの平均得点(三十二点満点)は二十七・五点(全国平均二十七・三点)「かかわり」のスキルの平均得点(三十二点満点)は二十五・二点(全国二十四・〇点)であり、「かかわり」のスキルは全国に比べて高い。積極的に友だちに関わろうとする子が多い。しかし、「かかわり」のスキルの中でも「みんなのためになることを見つけて実行している」のSSと「係の仕事をするとき、何をどうやったらよいか、意見を言っている」のSSは平均よりも低くなっている。この点で、学級活動への取り組みを充実させていく必要がある。個々の状態を見てみると、「配慮」のスキルに落ち込みが見られた児童(六十%未満)は二名。「かかわり」のスキルで落ち込みが見られた児童(六十%未満)は四名おり、両方のスキルに落ち込みが見られた児童は二名であった。上記の児童を、学級満足度尺度のプロット図で照らし合わせてみると、ほとんどの子が非承認・不満足群に属しており、学級内にうまく居場所が作れていないことがわかった。SSを身につけさせ、よりよい人間関係を築くための支援が必要であると考える。さらに学級の中で、人と関わる楽しさを体験させていきたい。

() 全国平均	6月	10月	2月
満足群 (以前40%→38%)	67.7%	64.5%	71%
非承認群 (以前20%→18%)	3.2%	3.2%	3.2%
侵害行為認知群 (以前15%→18%)	6.5%	12.9%	9.7%
不満足群 (以前25%→26%)	22.6%	19.4%	16.1%

〈資料5〉



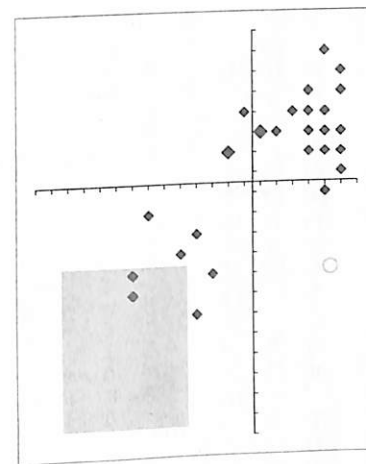
〈資料6〉



〈10月〉

クラス平均	承認得点	13.2
	被侵害得点	7.1

〈資料2〉



〈6月〉

クラス平均	承認得点	13.2
	被侵害得点	6.7

〈資料1〉

①SGE (例) ~ 「別れの花束」4年生バージョン~ 「友だちの良さや嬉しかった気持ちをメッセージにして伝えよう」(特別活動)

ねらい: 人の良さを見つけることで、他者に対し肯定的な感情を育て、温かな人間関係をつくる。

(エクストラクション) ○今までのいろいろな仲間作りをしてきました。楽しかったですか。今月はなにかよし句間です。友だちをたくさん作ったり、友だちの良さを発見する句間です。今日の目的です。みんなは4月にクラス替えがあり、新しい友だちもたくさん作ることが出来ました。みんなはいろいろな人に支えられて生きています。特に、友だちからの支えは大きな力となっているはず。今日は、そんな お友だちに感謝のメッセージを伝えたいと思います。

○では、自分を支えてくれた友だちのことを振り返ります。目を閉じて下さい。今まで自分が困っているとき、悲しいときに励ましてくれたお友だちのことを思い出して下さい。「はーい」目を開けて。

○あのとときこんなことしてくれて嬉しかった「ありがとう」の気持ち、この人にはこんな良さがある...等日頃思っているプラスのメッセージを友だちに書いてもらいます。

○やり方を言います。前時に作ったカードを首からかけます。背中の方へカードを回して下さい。こんな風に。(デモンストレーション) サインペンを用意します。今から20分間です。今日書ききれなかったら、後で時間をとります。



○ルールは20分で出来るだけたくさんの人にメッセージを書く。しゃべることは出来ません。書いている間BGMが流れますが、気にしないで下さい。質問ありますか。(ありません) それでは始めます。

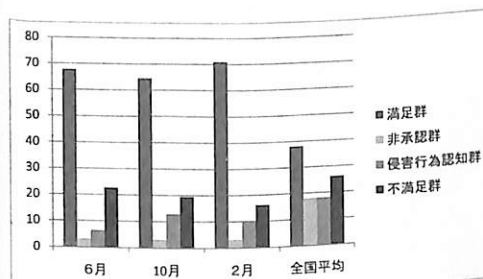
(エクササイズ)

○はーい、やめー。静かに集合します。5分間時間をあげますから、友だちのメッセージを読んでみて下さい。はいどうぞ。(一斉に読む) ニコニコと真剣に読む)

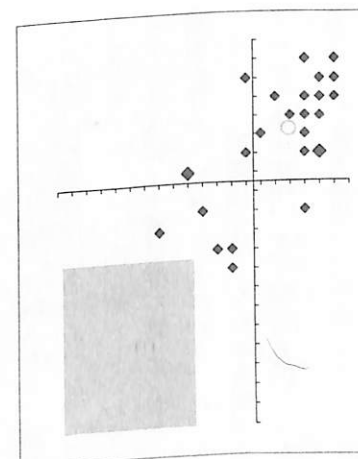
(シェアリング)

○感じたこと、気づいた事を言います。
・友だちの優しさが伝わってきた

○〇さんがこんな事を思っていて嬉しかった
・自分の気持ちが温かくなった。優しいメッセージや嬉しかったことが書いてあって、もっと友だちにいい事したいなって思った。○ありがとう。まだ全員に書いてない人もあるので、また時間をとりたと思います。友だちのメッセージをしっかりと心にとんで自分の良さを知り、さらに日頃から友だちの良いところをたくさん見つけていきましょうね。先生もみんなのニコニコ笑顔でメッセージを読んでいる姿が嬉しかったです。終わります。



〈資料4〉



〈2月〉

クラス平均	承認得点	20.3
	被侵害得点	9.1

〈資料3〉

